

【こども家庭科学】第2回検討委員会 2026.1.5

こども家庭科学研究費補助金：成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業  
(研究課題：24D0401)

**知的障害・発達障害児とその家族のQOLを維持する支援体制整備に向けた研究  
相談支援調査研究（分担研究者：橋本創一）**

協力

中澤若菜、望月太敦、小河周平、永野叙子、平田真基、加藤翼、大塚栄子

# 研究班のテーマ

## 研究班のテーマ

1. ライフステージに応じた連携
2. 児童発達支援センターの中核的な役割
3. 相談支援のあり方

こどものことを周りの大人たちが決めてはいないか？

**こども本人は？**

インタビューガイドの作成

# 面接調査項目表（事業所用）

- 1) こどものサービス等利用計画を作成する役割を担うことはありますか。担っている場合、計画作成の中で課題を感じることはありますか
- 2) こどものニーズを聞き取る際に工夫されていることや配慮されていることはありますか。大人との違いはありますか
- 3) こども本人と親の意見や希望が異なるような経験はありますか
- 4) 児童期からの引継ぎを行う際に、必要な情報はどのようなものですか。また、法制度上で、情報共有に関する制限や課題があると感じることはありますか
- 5) 地域の他の支援機関（学校、医療機関、療育施設等）と連携する上で、既存のコミュニケーションツールや会議の方法などを活用し、工夫している点がありましたら教えてください
- 6) 地域資源の活用において、より円滑なネットワークを構築するために必要なことを教えてください
- 7) 利用者に対して支援を提供する際に、どのようなニーズに最も多く対応していますか
- 8) ライフステージに応じたプラン策定に、どのような配慮をしますか
- 9) 支援を進める中で現在抱えている最も大きな課題は何ですか

# 面接調査項目表（利用者用） ※原本はルビ付き

- 1) 児童発達支援や放課後等デイサービス、相談支援事業所を利用されたことがありますか。利用されたことがある場合、どのようなことをしましたか。感想を教えてください

1 2 3 4

 

とても嫌だった/とても辛かった 嫌だった/辛かった 良かった/楽しかった とても良かった/とても楽しかった

- 2) 学生時代でどの時期（小学生、中学生、高校生など）が、楽しかった、良かったですか。また嫌だった、辛かった時期はいつですか

1 2 3 4

 

とても嫌だった/とても辛かった 嫌だった/辛かった 良かった/楽しかった とても良かった/とても楽しかった

- 3) こどもの頃にどんなチャレンジをしましたか。ここでのチャレンジとは【取り組んだこと】【挑戦したこと】などです。印象に残っていることはどんなことですか。また、チャレンジを試みたかったけど、チャレンジ出来なかった経験があったら教えてください

- 4) こどもの頃に“こういう人になりたい” “こんな暮らしや仕事につきたい” “こういう人生を送りたい” 等、どんな将来への希望や思いがありましたか。それらの希望や思いは、誰かに話したり、伝えたことはありますか

# 面接調査項目表（利用者用） ※原本はルビ付き

- 5) こどもの頃のご自分のきょうだいについて、どのような気持ちをお持ちでしたか
- 6) あなたの将来について、相談できる人はいましたか。相談をした場合は、誰にどのようなことを相談しましたか
- 7) どのようなサポートがあったら良かったと思うことがあったら、教えてください
- 8) あなたの今の生活について、教えてください。どのくらい満足していますか。また、これから、どのような生活、人生を送りたいですか



# 研究の概要

## 研究の概要

1. 全国の市区町村の中で先駆的に相談支援体制整備に取り組んでいる自治体に焦点をあて、体制整備に寄与する要因を検討する
2. 相談支援事業所職員と相談支援利用者から聞き取りを行い、相談支援のあり方について検討する



知的障害・発達障害児のこどものQOL（生命・生活・**人生**）

# 【予備調査1】 児童発達支援センターが抱える課題

<b>目的</b>	児童発達支援分野の相談支援体制の整備や児童発達支援センターの一元化に伴う課題等を明らかにする
<b>対象</b>	A市4カ所の児童発達支援センター
<b>方法</b>	管理職，児童発達支援管理責任者へヒアリング調査（60分）
<b>調査項目</b>	1. ライフステージに応じた連携 2. 児童発達支援センターの中核的役割 3. 相談支援のあり方

事業所	人数	職種
B	3名	管理職・児童発達支援管理責任者・相談支援専門員
C	3名	管理職・児童発達支援管理責任者・保育士
D	1名	管理職
E	2名	管理職・リハ職

## 明らかになった課題

- 制度基準を満たすにとどまらない地域における「ハブ」としての機能（子ども・保護者・保育教育機関をつなぐ役割）
- 中核機能の発揮には制度的制約や人材確保の課題が存在→「一通り分かった上でコーディネーションできる人」がポイント
- 現場の視点から、児童発達支援センターに求められる中核機能の内容と高度な専門性およびネットワークの専門性の具体的内実の解明
- 保護者を孤立させず，地域資源と連携した伴走支援
- 児童発達支援センターは，サービス等利用計画やケアマネジメントとは異なる役割を担う制度であるにもかかわらず，現行の運用には制度的役割とのずれが生じている可能性がある
- 相談支援事業所は，児童発達支援センターとの制度上の役割の違いや両者の関係性をどのように認識し，その認識は日常的な連携や支援実践にどのような影響を及ぼしているのか？

# 【予備調査2】 相談支援事業所が抱える課題

**目的** 障害児支援に関する実務的な知見を有する基幹相談支援センター職員を対象に予備的な聞き取りを行い、内容の妥当性や観点に関する示唆を得る

**対象** 障害児支援に関わる相談支援事業所職員（計画相談支援経験者）2名

**方法** 半構造化インタビューを実施→SCAT（Steps for Coding and Theorization）で分析

## 分析結果

① 児童期における計画サービス作成の政策的な課題

### ■ 支援現場の現状

児童本人の意思把握：発語の困難さ・経験不足・発達特性により極めて難しい

計画は保護者意向に強く引っ張られやすい

現場は「誰のための計画なのか分からなくなる」という葛藤が生じている

### ■ 構造的課題

児童期の意思・ニーズは未形成・可塑的 単回の聞き取りでは把握不能

本人・保護者・支援者の語りや観察知を分けて把握し、統合する必要性（二重・多層アセスメント）

プロセスは制度化されていない 相談支援専門員の裁量に依存

### ■ 政策的課題

現行制度は「ニーズは事前に確定できる」という成人モデルを前提

児童期の特性を十分に反映できていない

## 分析結果

### ②地域資源の活用や連携における既存ツールの有無や課題整理の困難さの要因

#### ■ 共通して確認された現状

- ・ 医療・福祉・教育・地域資源間の分断
- ・ **調整役が不在、または特定の個人に依存**
- ・ **連携は「困り感が高まった時」にのみ断続的に生じる**

#### ■ 既存ツールが機能しにくい要因

- ・ 地域資源マップや会議体はサービスの有無を示す静的、一覧型ツール
- ・ 実際の支援は、**本人の変化、家族の状態、支援者の負担が意思決定を左右**

#### ■ 課題整理が困難となる背景

- ・ 課題整理・資源調整の担い手が制度上不明確
- ・ **調整・連携・モニタリング実践が評価指標に組み込まれていない**

地域資源活用には、支援を行いながら反応や変化を捉えるアセスメントの視点（具体的支援による伸びしろをみる）と調整を前提とした仕組みが求められる

# 本調査の概要（今後の予定）

## 予備調査から得た視点

- こどものニーズと制度枠組みとの関係  
児童の意思やニーズ × 現行制度・支援計画作成の枠組み
- 現場で行われている支援の判断や工夫が言語化・共有されないまま、  
個々の支援者の経験に閉じてしまう状況
- 制度移行に伴う相談支援の空白

## 今後の予定

障害児通所支援を利用した当時の生活や経験について、成人期から回顧的に評価した語りをもとに、現在の人生および生活満足度・QOLに接続しているかを明らかにする

### 【第1研究】

障害児に関わる相談支援事業所の職員への面接調査

### 【第2研究】

障害児通所支援を利用した経験のある方への面接調査